

オープンラボラトリー

OPEN LABORATORY

京都芸術大学 共同利用・共同研究拠点
舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点
アニュアルレポート

VOL.10

2022年度

OPEN LABORATORY

京都芸術大学 共同利用・共同研究拠点
舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点
アニュアルレポート

拠点代表あいさつ 河田 学 P. 1



老いを巡るダンスドラマトゥルギー

テーマ研究 中島 那奈子 P. 2



多層化手法による音楽詩劇の創作と上演 ～アコースモニウムを中心とした音楽と映像、言葉の融合～

劇場実験型公募 (2020年度延期分) 檜垣 智也 P. 4



アフォーダンス・コレオグラフィ 誘導の振付

劇場実験型公募I ハラ サオリ P. 6



「明日の寓話」プロジェクト 一人間と非人間の新しいナラティブの創作に向けて

リサーチ支援型公募I 佐藤 朋子 P. 8



「インスタレーション/パフォーマンス」における身体と空間

リサーチ支援型公募II 楊 いくみ P. 10



近代的な個の輪郭をほどく演技体 ～『abさんご』を經由して、劇作論をしたためる～

リサーチ支援型公募III 西尾 佳織 P. 12



運営組織、編集後記 P. 14

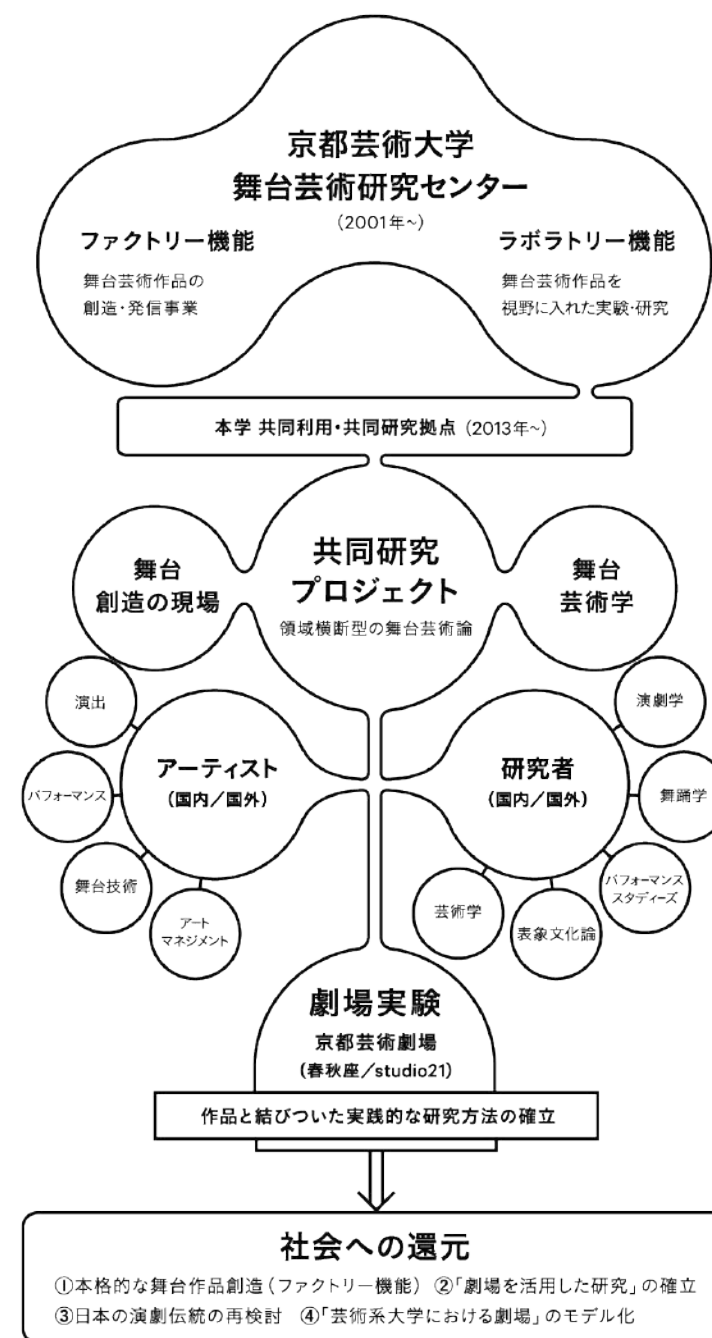
豊かな拠点形成へ

拠点代表 河田 学

京都芸術大学舞台芸術研究センターを母体とする「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」は、2013年に文部科学省から共同利用・共同研究拠点として認定され、今日まで領域横断的かつ実践的な研究活動の運営に邁進してきました。先進的な研究プロジェクトを広く公募するほか、本拠点独自に研究会やシンポジウム、事業報告会などを開催し、舞台芸術領域における研究と創造との高水準の融合、また研究ネットワークの醸成を推進しています。

本研究拠点の柱である公募事業は、二つのカテゴリーからなります。「劇場型公募」は、京都芸術劇場（大劇場＝春秋座、小劇場＝studio21）を活用した研究課題を支援対象とする本拠点ならではの取り組みです。一方、アートベース・リサーチ（Arts-Based Research）やリサーチ＝ベースド・アート（Research-Based Art）の重要性が高まる昨今の動向を受けとめ、2019年度には舞台芸術の新生面を開くリサーチ活動を支援対象とする「リサーチ支援型公募」を新設しています。

今後も、若手研究者の育成と研究成果の社会還元により一層注力しながら、舞台芸術研究の豊かな拠点形成を目指して活動してまいります。



老いを巡るダンスドラマトウルギー

〈老いと踊り〉というテーマのもと、3ヶ年計画の研究活動を行ってきたが、今年度は中国・北京を拠点に活躍する演出家・振付家であるメンファン・ワンさん、喜多流能楽師の高林白牛口二さんら多彩な舞台芸術家や研究者と連携した。コロナ禍のために2年にわたって中止・計画変更を余儀無くされていたが、2022年度は滞在型のクリエイションを実現し、これまで研究メンバーと共に行ってきた国内での研究内容に、ワンさんらの国際的視点の導入も取り入れて、アップデートした。そして、この老いを巡るダンスドラマトウルギー研究の集大成となるラボラトリーとして、2022年8月には京都芸術大学千秋堂での公開ショーイング『型の向こうへ／Encountering Histories』を、そして2023年3月には京都府庁旧本館旧議場で最終研究会を開催し、研究としてのパフォーマンス『型の向こうへ／声のレゾナンス』を上演した。

前年までの研究成果を踏まえて、新たな交流を通して作品化していくために、2022年8月だけではあったもののメンファン・ワンさんの招聘は非常に重要となった。まず、メンファン・ワンさんを含めたメンバーとの滞在型のクリエイションを研究の中心とし、その実験の成果発表としてダンスにおける「老い」の感受の仕組みを提示した。そして、その滞在制作の成果発表の会場には、千秋堂という外部の空間が内部に入り込む瓜生山の中腹にある円形の堂と、身体が歴史が空間の歴史に補強される歴史的な京都府庁旧本館旧議場という特別な場を使った。そして、双方の研究会において、言葉によるレクチャーと身体によるパフォーマンスが、同じ割合で存在するそれぞれ別々の上演形式を提示した。



「老い」と「ドラマトウルギー」

ダンスにおける「老い」の感受の仕組みには、ダンスそのものを見せるだけでなく、それがどう作られたかを言語化することが重要となる。この研究が目指す「ドラマトウルギー」には、言葉と動き、レクチャーとパフォーマンスが一体となる発表形態が求められた。千秋堂も旧議場もそれを可能にする場所としてふさわしく、WSパフォーマンス、パフォーマンスとレクチャーを組み合わせた上演形式となった。近代化を経て建てられた劇場ではない、千秋堂や旧議場という特殊な空間での実験を通して、老いの美を覚知しやすい仕組みや、ダンス創造において老いの美を支える人間関係づくりを模索した。

中島 那奈子 | ダンス研究・ダンスドラマトウルク

研究プロジェクト『型の向こうへ／Encountering Histories』 ※滞在制作と公開ショーイング

公開日時：2022年8月21日（日）
会場：京都芸術大学千秋堂
参加者：児玉北斗、高林白牛口二、平井優子、森山直人、メンファン・ワン、辻井美穂、岩井優、中島那奈子、田代啓希、西原多朱、天野文雄、新里直之、伊藤彩里、奥田知恵、一般来場者

中国・北京を拠点に活躍する演出家・振付家であるメンファン・ワンさんを、コロナ禍があけたタイミングで京都に招聘し、多彩な舞台芸術家や研究者であるメンバーとの滞在制作を行った。8月にやっと来日が叶ったメンファン・ワンさんとの約10日間の滞在制作では、集団創作の手法で、メンバーそれぞれが提案する日々のウォームアップからシーンを発展させ、最終的に1時間半程度のショーイングへとまとめていった。呼吸の稽古や会場を囲む山々の話、お互いの動きを真似るエクササイズ、バレエと能との身体を用いた対話、また周囲の山々や日没を取り込む語り、そして能楽師とダンサーによる「よろこびの舞」といったシーンができていった。異なる年代や、舞踊の型、役割、作品の作り方の違いを超えた、研究としての作品を目指し、リハーサル通訳は辻井美穂さんに依頼した。山の頂にある千秋堂でのショーイングを終えて、天野文雄さんが執筆したレビュー「超意識への挑戦」では、世阿弥の超意識と今回の即興の手法を結びつけ「いったい、ダンスのように、振りが中心で、言葉にも音楽にも頼ることがまれな舞台芸術にあっては、「超意識」という状況を作りだせるかどうか、成否の大き

な分かれ目なのではあるまいか」という指摘がなされた。また、この上演記録にとどまらない作品として、岩井優さんに15分の映像を編集してもらった（映像リンク <https://vimeo.com/808172156>）。

滞在制作中は、能の始まりとされる談山能や翁舞で知られる奈良の談山神社、愛知、岡山、直島などで森山直人さんやワンさんらと盛夏の中、フィールドワークを行った。さらに、愛知トリエンナーレや岡山では関連公演を、直島では杉本博司による日本の美意識をアップデートさせた作品を視察した。加えて、東京の室伏アーカイブと連携して8月5日にはワンさんと中島による催しを行った。ここでは「ベケットパーティー」と題されたプログラムの中で、ワンさんはベケット作品の創造プロセスについて紹介したレクチャー『Dance first. Think later.』、中島は動かないことができる可能性について論じたレクチャー『Think first. Dance later.』を行った。

また舞台芸術界のハラスメント防止への意識の高まりを受け、滞在制作中のリハーサルでは、研究メンバーと主要スタッフがオンラインハラスメント防止講座を受講した。さまざまなジャンルや世代、言語が交錯する研究メンバーが集まるこの研究会で、どのようなコミュニケーションが適切かここで再検討した。創造の現場でのハラスメント防止策については、舞台芸術研究センターや共同研究・共同利用拠点にも今後導入を検討するよう提言した。

研究プロジェクト『型の向こうへ／声のレゾナンス』 ※最終公開研究会、ショーイング

公開日時：2023年3月11日（土）
会場：京都府庁旧本館旧議場
参加者：児玉北斗、高林白牛口二、平井優子、森山直人、中島那奈子、西原多朱、守屋友樹、中村彩世、京響コーラス、小玉洋子、辻本圭、天野文雄、新里直之、伊藤彩里、奥田知恵、一般来場者
協力：公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団（京都市交響楽団）

ここでは重要文化財である京都府庁旧本館旧議場を、舞台及び客席として使用し、能楽師とダンサーによる「よろこびの舞」を再創作し上演した。研究会は、前半が平井優子さんと高林白牛口二さんによるパフォーマンスに、京響コーラスの合唱（指揮：小玉洋子 伴奏：辻本圭）が加わり、後半はメンバーの児玉北斗さんによる発表「動かないことの驚き—コンテンポラリーダンスと能における不動への姿勢—」と、森山直人さんによる発表「沈黙すること、語ること、歌うこと——『息の跡』をめぐって」が行われ、会場の観客を加えたディスカッションが行われた。かつて民衆が集まる広場「アゴラ」として始まった劇場をこの議場空間に立ち上げ、京都市交響楽団の混声コーラス30名とのコラボレーションを実現した。コーラスは、登場人物に共感するギリシャ悲劇のコロスのように、フォーレのレクイエムを歌った。ダンサー双方を魅力的に見せるよう配慮しながら、異なる型を習得した2人の身体が、呼吸や気の対話を通してつながり、明治日本の記憶を呼びおこす特別な空間で、動かないで歌う合唱隊の身体と反響しあった。また、この

場を目撃した「動かないことができる」観客は、この空間で動かない「老い」の身体に「まことの花」を咲かせた。研究会を終えてから、出演者の高林さん、平井さんがこのパフォーマンスによって2023年4月にダンス批評サイト「The Dance Times」の月間ベストダンサーに選出されるという嬉しい知らせが届いた。



研究プロジェクト『型の向こうへ／声のレゾナンス』 撮影：守屋友樹

研究組織
研究代表者
中島 那奈子 | ダンス研究・ダンスドラマトウルク
研究会メンバー（五十音順）
児玉北斗 | 振付家・ダンサー・芸術文化観光専門職大学講師
高林白牛口二 | 能楽師シテ方喜多流
辻井美穂 | パフォーマンス・アーティスト・通訳・翻訳
平井優子 | ダンサー・演出振付家
森山直人 | 京都芸術大学大学院芸術研究科客員教授・演劇批評
メンファン・ワン | 演出家・振付家
研究協力者（プロジェクト別、五十音順）
岩井優 | 撮影
田代啓希 | 録音
西原多朱 | 映像制作アドバイザー・tapetum works
天野文雄 | 能楽研究・京都芸術大学舞台芸術研究センター特別教授
新里直之 | 演劇研究・京都芸術大学舞台芸術研究センター研究職員
伊藤彩里 | 京都芸術大学共同利用・共同研究拠点事務局
奥田知恵 | 京都芸術大学大学院 芸術研究科修士課程

京響コーラス | 合唱
小玉洋子 | 指揮
辻本圭 | 伴奏
中村彩世 | 舞台監督
守屋友樹 | 記録撮影

協力
公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団（京都市交響楽団）

多層化手法による音楽詩劇の創作と上演 ～アコースモニウムを中心とした音楽と映像、言葉の融合～

檜垣 智也 | 作曲家・東海大学准教授

本劇場実験は、電子音楽演奏システム「アコースモニウム Acousmonium」(※1)を用いた音楽詩劇の制作を通じて、上演会場にカスタマイズした音響と映像の層的なプロジェクションによる舞台演出手法の開発を行う。本稿では、その具体的な手法について報告する。

今回制作した『石巻ハ、ハジメテノ、紙ノ声、……』は、全3部、約50分の舞台作品で、切れ目なく上演される。この作品では吉増剛造による同名の詩をテキスト(※2)とし、筆者が音楽制作、映画監督の七里圭が映像及び舞台演出を担当した。

(※1) 電子音響音楽の一種であるミュージック・アコースマティック Musique Acousmatiqueをコンサートで上演するために、1974年、フランスの作曲家フランソワ・ペール François Bayle (1932-)によって発案された多数のスピーカーを用いて音響空間を演出するサウンド・システム。

(※2) 初出は、現代詩手帖2022年3月号(思潮社)。

第1部は、詩人・吉増自身の朗読の録音と録画を中心に構成し、朗読と完全にリップシンクされた顔のアップ映像と共に、電子音響音楽を提示する。第2部は録音されたピアノ独奏曲を基調に、客席にいる詩人が無言で舞台上のピアノと戯れた後、映像上で詩作の間に見続けた金華山と出会う。第3部は、詩の世界観と詩人の記憶を反映した映像と電子音響によるファンタジーであり、詩人の姿と抽象的なキラキラとした光粒子状の映像と音響が複数の層に投射され、会場全体を包み込む【図1】。

本研究の起点となったアコースモニウムは、電子メディアに記録された電子音響音楽を再生する形態のコンサートにおいて、音響面の演出を担当する。上演会場の特性、作品やコンサートのコンセプトに基づいて、音響の方位、空間の大きさ、音質の異なる層を形成するために多数のスピーカーを配置する。そして、これらの層への投射状況を音響調整卓のライブオペレーションによって常に変化させ、作品体験の深化を図る。このようなアコースモニウムの多層化手法を映像投影などの舞台演出に応用し、視聴覚メディアを主体とした世界的に稀有な舞台作品を構想した。

本作では、同期している音声パート1つと映像パート2つから投射されるバーチャルな層に、生のリアルな層を重ね合わせ、層の入れ子構造を形成した。音声パートは、8種類のスピーカー全28台から成る25チャンネルのアコースモニウムから投射され、映像パートは2台のプロジェクターを用いて、舞台面の巨大な黒紗幕と舞台奥の Horizont 幕、客席内の床面およびスモークに投影される。さらに「生」の要素として、男の舞台上での動き、舞台外からの叫び声、人と人形の影の投影、照明、そして舞台装置としてグランドピアノを含めた。これら多様な特性を持つ層を、会場の物理的な空間の特性を活かして重ね合わせ、それらの存在感の重みを作品の進行に合わせて変化

させた。

本劇場実験では、音声と映像の記録メディアをプロジェクションする層のレイアウトおよび軽重の制御による舞台演出手法が検討された。この手法の有効性は、電子音響音楽や映画のように〈いつでも・どこでも〉を基本とした複製芸術においても、上演会場の特性を活かしたプロジェクションの演出によって、作品体験の一回性、つまり、〈いま・ここ〉の体験として強調できるかどうか、ポイントであると考えられる。本実験は春秋座でカスタマイズされたが、今後も別の機会においては層の構成とレイアウトを変更して上演することを構想している。執筆時点(2023年8月下旬)では、早稲田小劇場どらま館(2023年8月4～6日)での公演が終了した。また、近い将来、慶應義塾高等学校日吉協育ホール(2023年11月)での公演も予定されており、引き続きご注目いただければ幸いである。なお、本報告では演出の形式面についてのみを報告し、作品内容と演出の関連についても触れるべきであるが、紙面の都合により、別の機会に譲ることとする。



【図1】会場を包み込む映像と音響(写真:井上嘉和)

各研究会の活動報告

コロナ禍に見舞われ、2019年度に2度研究会を実施するも(第1回と第2回)、劇場実験を延期した。そして2020年度と2021年度は研究会を一旦凍結し、2022年度に改めて再起動することになった。その経緯は「オープンラボラトリー アニュアルレポート vol.8 — 2020年度—」にて報告したので、ここでは2022年度に行った第3回研究会以降の研究活動について報告する。

第3回研究会(非公開) 映像素材、音声素材の収録

日時: 2022年4月30日(土)、13:00-17:00
会場: スタジオ・ピオティータ 音楽スタジオ(東京都杉並区)
参加者: 七里圭、藤田恵美、檜垣智也、西原多朱、吉増剛造
吉増より最新の詩である『石巻ハ、ハジメテノ、紙ノ声、……』(現代詩手帖2022年3月号掲載)を劇場実験の題材とする提案があり、東京都内の貸しスタジオで吉増自身による同詩朗読とパフォーマンスを収録した。

第4回研究会(公開) 「言葉と庭の響き」電子音響詩劇ワーク・イン・プログレス公開収録(公開)

日時: 2022年5月22日(日) 17:30-19:30
会場: ながらの座・座 イベントスペース(滋賀県大津市)
参加者: 吉増剛造、檜垣智也、七里圭、高橋哲也、西原多朱、藤田恵美、牛山泰良、永松ゆか、椎名亮輔、一般参加者21名
第3回研究会で収録した吉増の朗読をもとに、檜垣が第1部の電子音響パートを制作し発表した。三井寺の庫裡の一つだった「元・正蔵坊」(登録有形文化財橋本家住宅)と古庭園を持つイベントスペース「ながらの座・座」に開発された吉増のパフォーマンスを七里の演出で計画し、映像・音声の材料を公開で収録した【図2】。収録後には一般参加者とともに討論会を行った。なお本研究会は、musicircus、tapetum worksの主催、一般社団法人文化農場(ながらの座・座)共催で実施された。



【図2】ながらの座・座での公開収録の様子: 手前・筆者、奥・吉増(写真:永松ゆか)

第5回研究会(非公開) 映像素材の収録

日時: 2022年8月25日(木)～28日(日)
場所: 宮城県石巻市内
参加者: 七里圭、西原多朱、吉増剛造
詩で描かれている石巻市内で映像素材の収録、吉増氏との打ち合わせを行った。

第6回研究会(非公開) 投影・音響実験・装置配置テスト

日時: 2022年12月26日(月) 10:00-19:00
会場: 京都芸術劇場 春秋座
参加者: 檜垣智也、七里圭、高橋哲也、牛山泰良、大田和司
上演会場での映像投影の実験、及び舞台上の装置や客席の配置について具体的に検討した。

第7回研究会(非公開) 音楽素材(ピアノ)収録

日時: 2023年2月20日(月) 10:00-19:00
会場: 東海大学湘南キャンパス スタジオ・ソナレ(神奈川県平塚市)
参加者: 檜垣智也、法貴彩子
内容: 第2部で使用するピアノ曲の収録を行った。

劇場実験上演(公開) 音楽詩劇(サウンドオペラ)『石巻ハ、ハジメテノ、紙ノ声、……』試演

日時: 2023年2月24日(金)～27(月)
会場: 京都芸術劇場 春秋座
参加者: 一般来場者102名
詩: 吉増剛造/作曲: 檜垣智也/映像: 七里圭
出演: 吉増剛造(歩く男)、檜垣智也(アコースモニウム演奏)
スタッフ: 演出=七里圭/撮影・映像技術=高橋哲也/撮影=藤田恵美/朗読(録音)=吉増剛造/演奏(録音)=法貴彩子(ピアノ)、田畑洗貴(瓦)/音響技術=牛山泰良、天野知亜紀、田代啓希、永松ゆか/照明=長尾裕介/演出補=鳥井雄人、田中聡/舞台監督=大田和司
※全3幕、約50分。舞台構成要素: 3台のコンピューター、アコースモニウム、2台のプロジェクター、黒紗幕、スクリーン、グランドピアノ
これまでの成果を劇場実験として公開した。初日(24日)は会場入りし舞台設営、2日目(25日)はリハーサル及び舞台実験本番、3日目(26日)は片付けと劇場内で追加収録、4日目(27日)は撤収を行った。
なお本劇場実験は、公益財団法人かけはし芸術文化振興財団、公益財団法人野村財団より助成を受けた。この場を借りて感謝申し上げる。

研究組織

研究代表者
檜垣 智也 | 作曲家・東海大学准教授
研究分担者
椎名亮輔 | 音楽学者・同志社女子大学教授
川崎弘二 | 電子音楽研究者・相愛大学非常勤講師
永松ゆか | 音楽家・相愛大学特任助教
研究協力者
吉増 剛造 | 詩人
七里圭 | 映画監督
西原多朱 | マネージャー・tapetum works
牛山泰良 | 音楽家・音響技師
大塚 勇樹 | 音楽家・音響技師
法貴 彩子 | ピアノ奏者・録音演奏助演
高橋 哲也 | 映像技術者
長尾 裕介 | 照明家
藤田 恵美 | 撮影
鳥井 雄人 | 演出
田中 聡 | 演出
田代 啓希 | 音響
大田 和司 | 舞台監督
田畑 洗貴 | 打楽器奏者・録音演奏助演
協力
hirvi, tapetum works, charm point
Special thanks
関 浩司、佛木 雅彦、桑野 仁、リボンアートフェスティバル、ヨコシネディーアイエー、ながらの座・座

アフォーダンス・コレオグラフィ 誘導の振付

ハラ サオリ | 振付家・ダンサー

プレリサーチ(非公開、オンライン)

日時：2022年6月～12月

参加者：ハラサオリ、筆谷亮也、小西小多郎ほか

主要な研究メンバーのハラ・筆谷がそれぞれベルリンとブリュッセルを拠点とすることから、プレリサーチはオンラインにて隔月で行った。双方の制作プロセスをヒアリングし合い、「知覚」「アフォード(誘導)」というキーワードに対して、照明、空間、身体の見点からレファレンスを持ち寄り、今回の実験における「振付」の定義を共有した。実験用の身体的な素材はハラは最新ワークインプログレス「Tender Confusion」から引用することになり、ここでのダンサーの動きは「ダンス」や「振付」ではなく「身体運動」と呼び、身体、光、オブジェクトを舞台上で同列に扱いながら、空間に配置する行為を「振付」と定義した。また筆谷の提案により、照明としての映像を取り入れることになり研究チームに映像担当の小西が加わった。

アドバイザーによるヒアリング(非公開)

日時：2022年12月

参加者：ハラサオリ、筆谷亮也、内野儀、佐々木正人

ハラ・筆谷の間での実験課題が明確になった段階で、佐々木正人氏、内野儀氏によるヒアリングをそれぞれ行った。日本におけるアフォーダンス研究第一人者の佐々木氏によるコメントを通しては、ハラは振付作品がアフォード(誘導)の見点から解体され、実験テーマの解釈が大きく拡張された。内野氏からは舞台研究の見点から、今回の実験がどのように創作へ回帰していけるのかという可能性について指摘と提案を受けた。ハラ・筆谷が日本と欧州を往復しながら活動するアーティストであることから、将来的に今回のリサーチをもとに作品を制作する場合、そこにどのような社会性・公共性を持たせるべきか議論の余地がある。

テクニカルプラン(非公開)

日時：2023年1月

参加者：ハラサオリ、筆谷亮也、小西小多郎ほか

劇場入り以降は照明・テクニカル先行で実験を進めるため、半年間のプレリサーチとヒアリングをもとに、筆谷が客席、照明プランを組み立てた。春秋座の客席を利用したプロセニウム式、回遊式、インスタレーション式のどれを選ぶかなど、フォーマットの選択肢を絞り、最終的に舞台上をアクティングエリアと客席に分け、同じアイレベルでのショーイングを想定したセッティングになった。この段階で、今回の実験で扱われる「知覚」とは、誰のものであるのか?という疑問が生ま

れた。筆谷のデザインする光が「観客」の知覚を誘導するのか、あるいは光がダンサーの知覚に働きかけることで新しい動きや状態が誘発されるのか、といったことが考えられたが、実験の段階では後者を軸に、ショーイングへ向けては両方の可能性を探ることになった。

劇場実験(非公開)

日時：2023年2月5日～8日、14～15日

会場：京都芸術劇場 春秋座

最初に期間中に試す照明と映像の仕込みを行い、使用しない機材を外していくというプロセスをとるために、初日は終日分担作業とし、舞台機構はテクニカルチームのみが使用した。別室でハラとダンサー2名がリハーサルを行い、これまで続けてきた「揺れ」のムーブメント・リサーチや、過去作品の一部を共有したダンサーからのフィードバックを取り込みながら身体運動の要素を発展させ、中盤以降はこの「揺れ」を異なる環境で試すために、傾斜面を模した3m×3mの装置上でリサーチを進めた。

2日目は、筆谷が全体を主導しながら照明アイデアを15-20パターンほど試し、3日目以降は全員で実験とフィードバックを繰り返しながらダンサーの知覚をどう誘導できるか、それが客観的にどんな状態であるのかを基準に、発展の可能性を探った。映像を担当する小西は、効果、オペレーション、モビリティの見点から筆谷とアイデアを練り、スモークの粒子をスクリーンとした立体的な投射、舞台前後からのデュアルプロジェクション、自動ライブカメラ、有機的な色・形・動きをもつ光の投射などを提案した。舞台演出において照明と映像が光量や情報量で拮抗するケースは多いが、今回コンセプトの立ち上げから協働することで視覚的にも豊かな効果が生まれていた。

劇場実験(関係者のみの限定公開)

日時：2023年2月16日

会場：京都芸術劇場 春秋座

約30名の関係者のみを対象に5日間の実験の成果を共有した。転換などのテクニカルな都合から二部に分け、『Sta』と『Vis』と題したものをそれぞれ20分ずつ上演し、その後は研究メンバー、佐々木正人氏、観客でのフィードバック会を行った。

“Sta”は「立つ」、「Vis」は「見る」を意味する語根＝言葉の最小単位であり、それぞれ stand, stay, stage / vision, visa, visit などが接続されることで単語となる。本実験もまた、「舞台作品」を解体した最小単位の要素について思索してきたことからこのように命名した。



『Sta』撮影：井上嘉和

『Sta』では、身体、オブジェクト、環境の重力関係に着目し、水平、垂直、傾斜、落下、上昇、揺れという現象を照明によって拡張させ、時間・空間的なダイナミズムを生み出すことや、2名のダンサーの中で起きている微細な知覚を視覚的に表出させる効果を探求した。



『Vis』撮影：井上嘉和

『Vis』では、極端に明度を落とした状況下で、ダンサー、空間、観客の間にどのような関係性が立ち上がるかという問いに取り組んだ。『Sta』と比較して、ダンサーと観客両方の知覚へアプローチするような光を利用するシーンが多く、生態心理学に基づくコミュニケーション理論の骨格をなす概念としての「知覚の公共性」について、舞台表現の見点から思索する余地を示唆した。

終演後は、研究メンバーのハラ、筆谷、小西、そしてアドバイザーの佐々木氏をゲストに迎え、1時間半のトークを行った。佐々木氏のフィードバックを軸に、身体と制約、意味と行為、運動の分解・拡張、描写と物語など、話題は多岐に渡り、終盤は出演ダンサーや観客も交えながらのオープントークとなった。(文字起こしを一部公開予定)

通常、特に国内フリーシーンの公演では、小屋入りした時点ですでに時間の猶予はなく、テクニカルに関してはあらかじめ組んだプランの確認と微調整に終わってしまうことが多い。振付家も各セクターから演出上の判断を求められるので、優先順位をつけながら経験則と日頃のシミュレーションをもと

にある程度即決していくことになってしまう。よって今回のように大型照明、映像、バトン、傾斜面などの舞台機構をフルスケールで使用しながら、微細な知覚効果を実験・観察できる機会は大変貴重で、今後の創作のための重要なレファレンスになった。本研究に協力頂いたチームメンバー、舞台芸術研究センターの皆様、そして作品未満のショーイングへ前向きな態度でご参加くださった皆様へ、心より感謝を申し上げたい。

『アフォーダンス・コレオグラフィ〈誘導の振付〉』

クローズド・ショーイング

関係者のみの限定公開

日時：2023年2月16日(木) 14:00-17:00

会場：京都芸術劇場 春秋座

振付・演出：ハラサオリ

照明：筆谷亮也

映像：小西小多郎

出演：益田さち 中津文花

舞台監督：大田和司

アドバイザー：佐々木正人

企画協力・アドバイザー：川崎陽子

アシスタント：伊地知 彩光

記録写真：井上嘉和

記録映像：小西小多郎 石田祥太郎

制作：山崎佳奈子

研究組織

研究代表者

ハラ サオリ | 振付家・ダンサー

研究分担者

筆谷 亮也 | 舞台照明家・アーティストティックコラボレーター

研究協力者

小西 小多郎 | 映像ディレクター

益田 さち | ダンサー

中津 文花 | ダンサー

大田 和司 | 舞台監督

内野 儀 | 学習院女子大学教授

佐々木 正人 | 多摩美術大学客員教授

川崎 陽子 | 舞台芸術プロデューサー

伊地知 彩光 | ダンサー

山崎 佳奈子 | 制作

小森 あや | 制作

「明日の寓話」プロジェクト 一人間と非人間の新しいナラティブの創作に向けて

佐藤 朋子 | アーティスト

「明日の寓話」プロジェクトは、人間の作った既存の物語と人間以外の視点を複合的に組み合わせ、新しいナラティブ・シリーズを創作するリサーチ・創作プロジェクトである。「明日の寓話」とは、1962年にレイチェル・カーソンが『沈黙の春』のはじめに掲載した、生き物がなくなった静寂をかかえる架空の町についての寓話だ。2020年代を生きる私たちにとっての「明日の寓話」は、どのような物語を持つのだろうか。人間と非人間の関係についてのフィールドワーク、各分野の研究者や実践者との対話やインタビュー、物語研究を通して思考・リサーチをした上で新たな物語を創作し、レクチャー・パフォーマンスとして発表する。

本研究では、兵庫県豊岡市を中心に鶴／コウノトリにまつわるリサーチを中心に行った。コウノトリの伝説、民話「鶴の恩返し」や縁起の良い取り合わせとされる「松に鶴」が本当はコウノトリだったのではないかという説、ツル科の大型鳥類の学術名である「antigone アンティゴネ」とギリシャ悲劇『アンティゴネ』など、歴史、伝説、人間と動物の関わりから、作品制作に向けた広範なリサーチを進めた。

研究プロセス／成果

コウノトリ／ツルに関わる場所や地域のフィールドワークを行った。豊岡市ではコウノトリ関連施設のほか、コウノトリとツルの襖絵が残る隆国寺や、伝説が残る久々比神社への訪問をしたり、ツルと名前のお店を回ってみたり、かつてコウノトリを観る場所として全国から人が集まってきたという鶴山の跡地へ登ってみたりした。豊岡市内では実際に外を飛んでいる野生のコウノトリにも出会うことができ、その大きさと迫力に驚く。また鶴の恩返しの物語が色濃く残る山形県の夕鶴の里、たくさんのツルが毎年渡ってくる鹿児島県和泉市にも訪問し、多様なツルと地域の関わりをみていった。

訪問先

鴻の湯（兵庫県豊岡市）／豊岡市立コウノトリ文化館、兵庫県立コウノトリの郷公園（兵庫県豊岡市）／ハチゴロウの戸島湿地（兵庫県豊岡市）／隆国寺（兵庫県豊岡市）／久々比神社（兵庫県豊岡市）／鶴山（兵庫県豊岡市）／鴻神社（埼玉県鴻巣市）／京都市立動物園（京都府京都市）／夕鶴の里（山形県南陽市）／出水市ツル博物館（鹿児島県出水市）／よこはま動物園ズーラシア（神奈川県横浜市）

コウノトリ／ツルに関連した専門家へのインタビューを実施した。兵庫県立コウノトリの郷公園の主任飼育員である船越稔さんには複数回ご協力いただき、実際にコウノトリを育ててきた過程や、現在そしてこれからのことをお聞きし、そして飼育方法の実演までしていただいた。金沢大学先端観光科学研究センターの菊地直樹さんにはコウノトリの保護活動と地域の関わりについて、とくに地域の人々にコウノトリがツルと呼ばれることがあることについてお聞きした。大阪大学・社会技術共創研究センターの武田浩平さんにはツルのダンス、ひとつひとつの動作について、現在わかっていることをお聞きした。JA たじまコウノトリ育むお米生産部会部長の暇悦喜さんとは実際に暇さんの畑の横でお会いしたのだが、畑の土を見せていただき、小さいころからのコウノトリ（ツル）との関わりや

近所に住みついているコウノトリについてのお話を伺った。北海道大学の久井貴世さんには、鶴が歴史上どのように日本で扱われてきたのか様々な事例をお聞きし、日本において鶴が人にどのような想像力を与え、また関わりを持ってきたのか伺った。

また他にも豊岡市民の複数の方々にもお話を伺う機会があり、それぞれの立場からコウノトリについて話していただいた。



電柱にとまったコウノトリ（兵庫県豊岡市）

物語をベースとしたリサーチ

コウノトリ／ツルにまつわる物語として有名なものに『鶴の恩返し』がある。その後『鶴女房』『夕鶴』ともなっているこの物語は全国に広く残り、日本に生まれ育った人であれば知らない人は少ないであろう。この物語に出てくる鳥は、もしかしたらツルではなくコウノトリであり、機織りの音はコウノトリのクラタリング（コウノトリは大人になると声帯が退化し声が出ないので、クチバシを叩いて音をだすことをクラタリングと呼ぶ）ではないのか、という説もある。またツルやコウノトリは毛が抜ける時期があるらしく、その時期はうまく飛ぶことができないらしい。すでに知られている物語を、その周辺にある事例を集めることで、新しい視点で物語をみることを試みた。

また、ツルの大型種であるオオヅルの学名は「antigone アンティゴネ」といい、その名前はギリシャ悲劇の『アンティゴネ』からつけられたという説がある。オオヅル（アンティゴネ）は首から上が赤いのだが、その姿が岩の中で首を吊ったアンティゴネの姿なのではないか、という説や、他のギリシャ神話に出てくるもうひとりのアンティゴネではないのか、という説もあり、理由ははっきりしていない。日本語訳や英語訳された複数の『アンティゴネ』の戯曲を読むことで、アンティゴネの話や言葉に近づいていき、オオヅル（アンティゴネ）という今もインドなどの地域で生息し、日本でも動物園で会うことができる存在を通して、新たな物語を創作することを模索している。

主な参考文献

木下順二「夕鶴」『木下順二戯曲選 2』（岩波文庫、1982年）／山本安英「鶴によせる日々」(未來社、1987年)／ソポクレス『アンティゴネー』(吳茂一訳、岩波文庫、1961年)／ソポクレス『アンティゴネー』(中務哲郎訳、岩波文庫、2014年)／ベルトルト・ブレヒト「アンティゴネ」(谷川道子訳、光文社古典新訳文庫、2015年)／Anne Carson, Antigone (Oberon Classics, 2016)

公開ディスカッション

開かれた議論の場を研究会として設け、領域横断的な対話の場を開いていった。会の始めには佐藤から創作途中のテキストのリーディングがあり、その上で、ゲストに逆巻しとねさんを招いてのディスカッション(第1回研究会)を行い、またファシリテーターに高橋綾さんに参加してもらい、哲学対話を行った(第2回研究会)。どちらも地域の方をはじめとして一般参加の方が多く、個人的なコウノトリ／ツルとの関わりや、本研究が持つテーマに関してそれぞれの経験からの言葉を聞くことができた。各回の概要は【各研究会の活動報告】を参照。

各研究会の活動報告

第1回研究会(公開) ゲストトーク

日時：2022年6月25日(土)、15:00-17:00
会場：城崎国際アートセンター エントランスホール (KIAC、兵庫県豊岡市)
ディスカッションゲスト：逆巻しとね(学術運動家／野良研究者)
一般参加者：約20名

現代フェミニズム思想の旗手ダナ・ハラウェイや共生論を専門とする学術運動家／野良研究者の逆巻しとねをゲストに迎え、本研究のリサーチと、創作途中の成果、さらには今後の展望を共有した。



第1回研究会：ゲストトークの様子

第2回研究会(公開) オープントーク

日時：2022年11月5日(土)、19:30-21:00
会場：城崎国際アートセンター スタジオ1 (兵庫県豊岡市)
ファシリテーターゲスト：高橋綾(大阪大学)
一般参加者：約20名

佐藤による創作途中のパフォーマンスを試演したあと、ファシリテーターに高橋綾(大阪大学)を迎え、地域の方々や一般の方々に参加してもらい、パフォーマンスを元に「問い」を定め対話をしていく哲学対話を試みた。

研究組織
研究代表者
佐藤 朋子 | アーティスト
共同研究者
鈴木 和歌奈 | 文化人類学者
研究協力者
逆巻しとね | 学術運動家・野良研究者
高橋 綾 | 大阪大学
協力
城崎国際アートセンター (KIAC)
中原信貴
澤志 萌

「インスタレーション／パフォーマンス」における身体と空間

楊 いくみ | パフォーマンス作家・美術家

本リサーチは、私 楊いくみの作品形式でもある「インスタレーション／パフォーマンス」という芸術形式において、特有の身体性、空間性の技術を探る試みである。初めに「インスタレーション／パフォーマンス」とは何かについて整理したい。お伝えしなければならないのは、この標語は現在確固たる芸術形式として確立しているものではなく、名の通り二つの芸術形式――インスタレーションとパフォーマンスの二つを持ち合わせている作品に対し、私を含めたアーティストたちが自身で呼称しているようなものである。主に美術館やギャラリーなどで行われるパフォーマンスで使われることが多く、「ダンス・エキシビション」と表されることもある。特徴としてはまず鑑賞者の動きが自由であること。そしてパフォーマンスは「移動する観客」を考慮した上で、パフォーマンスの空間に対する「配置」「移動」、そして「行為」を表現の主軸にしていることが挙げられるだろう。インスタレーション空間に身体が投入されることによる、空間自体の変容を経験する作品をここでは「インスタレーション／パフォーマンス」とする。

そこでの私の興味は、インスタレーション／パフォーマンスの身体性や空間性には、ある種共通の技術が成熟しているのではないかという疑問にあった。上記のような作品形式は、遡ればその起源に1960年代以降に発生した「パフォーマンス・アート」があることは明らかであるが、同時にその時代はアーティストやダンサーが手を取り、一回性の中に起こる偶然性を見つめ、技術という権威に立ち向かった時代でもある。つまりパフォーマンス・アートはそれ自体において芸術の「脱技術化」を目指すものであり、現在までそこに対する技術の議論はナンセンスであるとされる風潮があるように思われるのである。しかしパフォーマンス・アートの始まりからすでに60年ほど経ち、その間多くの国際芸術祭や展覧会で優れたパフォーマンス作品が生み出されてきたなかで、何らかの技術、手つき、作法が生まれてきたことは間違いないだろう。

本リサーチは、上記の疑問から、パフォーマンスのなかでも特に、私自身の行う「インスタレーション／パフォーマンス」においての空間性・身体性のバリエーションを調査すべく、2022年に開催されたヨーロッパでの国際芸術祭、美術館を鑑賞した。リサーチは20日間で、ドイツのベルリン、カッセル、イタリアのヴェネツィア、フランスのパリの計3カ国4都市を回り、移動の日以外はほぼ鑑賞、観劇にあてた。なお今回のリサーチをヨーロッパにした理由については、まずは大型の芸術祭が多くパフォーマンス実践が行われる期待があったこと、パフォーマンス空間における日本の鑑賞者のあり方との違いを確認したかったためであるが、リサーチを行った2022年8月はまだ欧州でも公共機関でのマスクの着用が義務づけられているような状況で、パフォーマンス作品については感染症拡大前ほどの大型のものではなく、何より鑑賞者の数が制限されていることが作品にも影響していた。それでもその状況下の多くのパフォーマンス実践を短期間に見ることができた。本稿はそのなかでも今回のリサーチにおいて特筆すべき、2つの展覧会について報告する。

1.Documenta15-BAAN NOORG COLLABORATIVE ARTS & CULTUREが作るスケート場(2022.8.6)



BAAN NOORG COLLABORATIVE ARTS & CULTUREの会場の様子(撮影:楊いくみ)

ドクメンタとはドイツのカッセルで5年に一度行われる大型芸術祭である。15回目となるドクメンタ15では総合キュレ

ターにインドネシアのコレクティブであるルアンルパ(ruangrupa)が就き、ドクメンタにおいて初めてのアジア人キュレーターとなった。印象的であったのが、メイン会場の一つであるドクメンタハレで発表された、タイのコレクティブBAAN NOORG COLLABORATIVE ARTS & CULTUREが作る大型のスケート場を有した巨大インスタレーションである。普段より地域社会コミュニティとアートのプラットフォームを作り出す彼らの構造物や壁画はそれだけでも圧巻だが、特筆すべきはここでの鑑賞者の様子である。スケート場の台はそのまま鑑賞者が集うスペースにもなっており、スケートを楽しむ親子はもちろん、構造物にメッセージを書く人、友人と会話する人、食事を楽しむ人、DJを楽しむ人、様々であった。つまり、ここでの鑑賞者には、音を立てずに物知り顔で歩くべきかどうか、参加型アートによく分からないけれど参加してみるべきかどうか、といった悩みはなく、リラックスすることを許容された、

新しい鑑賞者に見えた。それを誘導したのは紛れもなく、この空間とインスタレーション構造物の仕組みとセットアップなのだろう。この空間を担保したまま、パフォーマンスを行うにはどのような身体が有効か、身体表現が入ることによって、ここがどう変わるか／変わらないかを考えるばかりであった。

2.Pinault Collection『Around Annlee』



ピノー・コレクションでのティノ・セーガルのパフォーマンス後の様子(撮影:楊いくみ)

2021年にオープンを迎えたパリの現代美術館、ブルス・ドゥ・コムルスでは、現代アートコレクターのフランソワ・ピノーのコレクション展「Pinault Collection」が開催されていた。ここでのリサーチにおいての期待は、ドクメンタとは逆に、90年以降の現代美術のパフォーマンスの重要作品を見ることであった。具体的には、ティノ・セーガル(以下、「セーガル」)の《Ann Lee》、フェリックス・ゴンザレス＝トレス(以下、「トレス」)の《Go Go Dancing Platform》(1991)である。特にトレスのこの作品は、銀色のボクサーパンツのみを履いた鍛えられた男性が、展示台(お立ち台)の上で一日最低5分間踊るといものであるが、発表当時のパフォーマンスが1ヶ月間こなしした後、「さらし者の気分」になって落ち込んだという。上演芸術と違い、彫刻と同列に発表されるインスタレーション／パフォーマンスでは、このようなパフォーマンスの気分は避けて通れない。理由は、自分を見ずに通り過ぎられる／ニヤニヤしてヒソヒソする／びっくりして逃げるとい美術の鑑賞者がとる動きによるものである。最初の発表から20年経った現在だが、鑑賞者がどのような動きをするのか、とても興味があった。結果は、すでに名作となっている作品であるからして、パフォーマンスが行われると多数の鑑賞者が固唾を呑んで注目しているが、やはり困惑気味に立ち去ったり、ニヤニヤ・ヒソヒソしたりする鑑賞者は未だ多くいた。対照的であったのがセーガルの《Ann Lee》のパフォーマンスであった。フィリップ・パレーノの巨大スクリーン内のアニメーションのアン・リーと運動して、セーガルのパフォーマンスが出てくる。パフォーマンスは、スピーカーの音響と運動しながら、腕だけを細かく動かし、ゆっくりと状態を床へ崩していく。全体では20分のパフォーマンスであった。まず、鑑賞者が床に座っているという構造がある(計4回見たが、毎回多くが座っていた)。このリラックス鑑賞方法によりインスタレーション／パフォーマンスの鑑賞耐久時間は格段に伸びると気づくことができた(それが良いか悪いかは別として)。

そしてもちろん前途の鑑賞者のように、立ち去る者や耳打ちし笑い合う者も多くいたが、セーガルのパフォーマンスは、パフォーマンスも笑っているのである。注視していると、幾度となく目が合い、笑いかけられる。この作法について記述したいことはたくさんあるが、効果としてまとめるのであれば、この居方は鑑賞者とパフォーマンスを敵対関係におかず、空間の共有者として成り立たせることに成功していたであろう。そしてそれはパフォーマンスの緊張の質も変えているのではないかと考えられる。



玉山拓郎展 Something blackでのパフォーマンスの様子(撮影:村田啓)

今回、支援いただいたリサーチ資金は渡航費・鑑賞費に回ってしまったため、欧州リサーチは私1人で行うものに留まり、他の方との意見交流や、実践を行うまでには至らなかった。しかし代わりに一人での考察を貫徹する期間となったため、今回のリサーチ研究を深め、そこから生まれる可能性を同年に研究論文として『多摩美術大学研究紀要 37』へ寄稿することができた。このことは自身の今後の制作実践において一つの指針となる。また翌年4月にはインスタレーション作家・玉山拓郎の個展においてパフォーマンスを行う機会をえて、具体的にインスタレーション空間からパフォーマンス空間への変容の瞬間には何が起り、どのようなバリエーションがあるかを、鑑賞者と共に確認していく実践ができた。今後も、直近では渋谷パルコという商業施設を用いたパフォーマンスの企画があるため、今回のリサーチの実践的アプローチの成果として作品にしていきたい。

ヨーロッパ周遊リサーチ(非公開)

日時: 2022年7月26日(火)~8月18日(木)
場所: ベルリン/ベルリンビエンナーレ・各会場、美術館・ギャラリー (KÖNIG GALERIE, Neue Nationalgalerie, Tanya Leighton, Galerie Max Hetzler, GALLERY WEEKEND, Schiefe Zähne, Galerie Isabella Bortolozzi, Tanya Leighton, LAGE EGAL Curatorial Projects, KW Institute for Contemporary Art, Galerie Neu, Hamburger Bahnhof, Zion Church)
カッセル/ドクメンタ 15 各会場
ヴェネツィア/ヴェネツィア ビエンナーレ 2022 "Milk of Dreams" および各会場
パリ/ブルス・ドゥ・コムルス、オルセー美術館、ポンピドゥーセンター
参加者: 楊いくみ

研究組織
研究代表者
楊いくみ | パフォーマンス作家・美術家

近代的な個の輪郭をほどく演技体 ～『abさんご』を經由して、劇作論をしたためる～

西尾 佳織 | 劇作家・演出家・鳥公園主宰

筆者は2019年まで作家・演出家として「自然」な会話体で戯曲を書いてきた。しかし今、その上演に固有の演技の発明を要請する戯曲の文体を獲得したいと思っている。そこで、そのような文体を持ったテキストであると思われた黒田夏子の小説『abさんご』を3人の演出家——三浦雨林、和田ながら、蜂巢ももに渡し、彼女たちが俳優とともにテキストの要請に応じて演技体を生み出すプロセスを観察させてもらうことで、自分なりの劇作論を進めたいと考えた。

「自然」な会話体で書かれた戯曲ではなぜダメなのか?という、俳優が各々で「自然」に自分の役を演じられればある程度成立してしまう戯曲(しかし裏を返せば、それ以上を俳優が要請されていないという意味でもある)の文体が、演劇から集団性を失わせているように思ったのだ。上演がどのようなものであるかについての責任を負うことから、俳優が疎外されている。そこを回復するためには、上演をつくるために集まった人々があいだに置き、ともに応える対象としての戯曲が必要なのではないか。各々がそれぞれに応じていけば済むようなものでなく、「われわれ」としての態度を持たなければ太刀打ちできぬもの。

そのようなテキストとして、黒田夏子の『abさんご』は適任に思えた。『abさんご』の文章は、固有名詞を一切使わず主語も極力排し、人は「(動詞)する者」、モノは例えば「傘」なら「天からふるものをしのぐどうぐ」と記述されるといったように、名詞ではなく動詞中心に編まれている。主体の側からではなく、出来事や関係性の側から物語が記述されている。一人の俳優が一人の登場人物を「自然」に演じるだけのアプローチでは到底扱い切れないこのテキストを、演出家と俳優に手渡してみたいと思った。

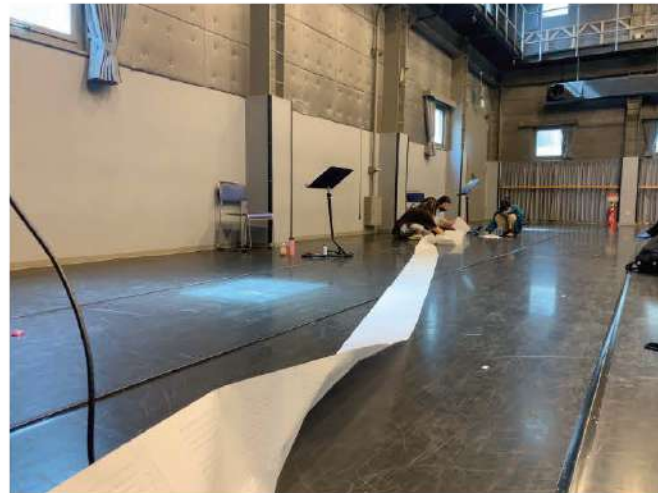
なお三浦、和田、蜂巢の3名とは、2020年度から2022年度まで鳥公園の主宰とそのアソシエイトアーティストという関係性で協働しており、本研究以前から『abさんご』を題材として、2020年度に読書会、2021年度にワークショップを行っていた。

第1回研究会(公開) 三浦雨林チーム ワークインプログレス

日時: 2022年5月9日(月)・11日(水)、両日ともに13:00-17:00
会場: 森下スタジオCスタジオ(東京都江東区)
参加者: 西尾佳織、三浦雨林、佐山和泉、新田佑梨、スティーブ・コルベユ、一般参加者数34名

三浦は「代行」をキーワードに、俳優二人(+部分的に三浦自身も出演)が登場人物たちに「なり切る」ことなく、小説の原文そのままのテキストを様々な方法で「読む」というアプローチを採った。「読む」俳優たちを観ることで、観客は『abさんご』のテキストと出会い、そのなかを俳優に導かれながら歩くことになる。

フィードバック会では翻訳家のスティーブ・コルベユ氏から、俳優とテキスト/翻訳者とテキストの関係と比較検討する視座が示された。コルベユ氏曰く、西洋語圏では翻訳者は主体を隠してテキストに「同化」することを求められるが、日本の翻訳者は翻訳論を語ったりエッセイを執筆したりと、主体を露わにし、テキストをテキストとして「異化」する傾向にある。今回の俳優たちも、徹底してテキストをテキストとして扱い続けていたが、俳優同士の関係、空間との関係、観客との関係などから、行為や視線、立ち方の取捨選択に何らかの必然性が生じかけており、「役を演じる」ではなく「役割を務める」ことから演技を構築することの可能性が感じられた。



第2回研究会(公開) 和田ながらチーム ワークインプログレス

日時: 2022年7月2日(土)17:00-19:30、3日(日)14:00-16:30
会場: Social Kitchen(京都市上京区)
参加者: 西尾佳織、和田ながら、金子仁司、古川友紀、山城大督、一般参加者21名

和田は、『abさんご』の文体において過去を振り返り内省する話者が、視点や時制の急激な切り替わりをしれっとシームレスに取り入れてくる点を取り上げ、「文体のカメラワーク」と

いうコンセプトを設定。そのカメラワークの動きをまずはテキストから丁寧に読解し、次に俳優が、そのようなカメラワークを行うカメラそのものになったり、そのカメラを扱う存在になったりしながら——つまり文体のカメラワークに振り回されて身体的に影響を受けながら、文章を読み上げることを試みた。俳優がスマートフォンを構えながら語り、その枠に切り取られた風景が観客にも時折見えることで(もしくは見えないことで)、語られる風景へのイメージが観客の内立ち上がる手法は、印象的な発見であった。



第3回研究会(公開) 蜂巢ももチーム ワークインプログレス

日時: 2022年8月27日(土)17:00-19:30、28日(日)14:00-16:30
会場: おぐセンター2階(東京都荒川区)
参加者: 西尾佳織、蜂巢もも、鈴木正也、藤善麻夕帆、清水寛二、一般参加者20名

蜂巢は、『abさんご』の話者が過去を振り返って記憶を語ることは、誰に向かって、どのようなシチュエーションで可能になるか?という問いから、「閻魔様に向かって過去を懺悔するように語る」構図を設定した。『abさんご』を理解するための補助線として、國分功一郎『中動態の世界』の意志と責任のパートを参照。

フィードバック会では、俳優二人と演出家が、『abさんご』のテキストはとにかく読みづらく、どこまで自分に近付けて「自然」に内から出るものとして扱ってよいか迷ったと話し、それに対して能役者の清水寛二氏から、能役者は役の気持ちを読解的に理解はしても、役者自身がその感情になろうとすることはないと、応答があった。



3つのワークインプログレスそれぞれに、面白い発見があった。しかし、この方向では近代的な個の輪郭はほどけないだろうとも思われた。3チームのアプローチは全く異なっていたが、どこもほぼ全編にわたって小説のテキストが強固にあり続け、そこに個人として対峙する俳優を見る、というのが観客としての私の体験だった。『abさんご』は小説という表現だからこそ出来ることを極めた作品だ。だからこそ、それを演劇として立ち上げるためには表現の変換が必要である。具体的には、上演台本の作成が必要だと思う。また、一人の俳優がテキストに対峙するシーンのオムニバス形式が多かったのだが、私は俳優Aと俳優Bの演技のあいだの交通が見たいのだと、本研究を通して自覚した。俳優Aと俳優Bの演技のかたちが同じである必要はない。ただ、二つの異なるかたちが、相互の交通を含んだものであってほしいと思う。演技によって俳優の個の輪郭がほどけることで、立ち会う観客の個の輪郭もほどけることを期待しているのだ、という気づきもあった。

上演における集団性のあり方に、戯曲の文体を通してアプローチするのは、なかなか難しいのかもしれない。次のステップとして今度は筆者自身が、『abさんご』の上演に取り組むことを検討している。

研究組織

研究代表者
西尾 佳織 | 劇作家・演出家・鳥公園
共同研究者
三浦 雨林 | 劇作家・演出家・隣屋
和田 ながら | 演出家・したため
蜂巢 もも | 演出家・グループ・野原
研究協力者(プロジェクト別、五十音順)
佐山 和泉 | 俳優・東京デスロック
新田 佑梨 | 俳優・青年団
スティーブ・コルベユ | 聖心女子大学准教授・翻訳家
※以上、三浦雨林チーム

金子 仁司 | 俳優・Kondaba
古川 友紀 | ダンサー・散歩家
山城 大督 | 美術作家・映像作家
※以上、和田ながらチーム

鈴木 正也 | 俳優・libido:
藤善 麻夕帆 | 俳優
清水 寛二 | 能役者
※以上、蜂巢ももチーム

運営組織

運営委員長(拠点代表)

河田 学(京都芸術大学芸術学部学部長/同文芸表現学科教授/文学理論・記号論)

運営委員

天野 文雄(大阪大学名誉教授/能楽研究)

安藤 善隆(京都芸術大学舞台芸術研究センター所長/同教授)

内野 儀(学習院女子大学国際文化交流学部日本文化学科教授/舞台芸術論・批評)

大田 和司(京都芸術大学舞台芸術研究センター技術監督/舞台監督)

岡田 蒔子(京都芸術大学芸術学部舞台芸術学科専任講師/演劇研究)

岡村 恵子(東京都現代美術館学芸員)

小崎 哲哉(京都芸術大学大学院芸術研究科教授/ICA 京都『REALKYOTO FORUM』編集長)

川村 毅(ティーファクトリー主宰/劇作家・演出家)

北村 明子(信州大学人文学部教授/振付家・ダンサー)

木ノ下 裕一(木ノ下歌舞伎主宰/補綴家・ドラマトゥルク)

中島 那奈子(ダンス研究・ダンスドラマトゥルク)

長島 確(東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科准教授/ドラマトゥルク)

中山 和也(京都芸術大学芸術学部情報デザイン学科/大学院芸術研究科教授/ICA 京都副所長)

平井 愛子(京都芸術大学芸術学部舞台芸術学科教授/演技論・プロデューサー)

星野 太(東京大学大学院総合文化研究科准教授/美学・表象文化論)

宮 信明(京都芸術大学芸術学部通信教育部芸術教養学科准教授/芸能史研究・伝統芸能研究)

森山 直人(多摩美術大学美術学部演劇舞踊デザイン学科教授/演劇批評)

矢野 浩二(京都芸術大学芸術学部キャラクターデザイン学科/マンガ学科教授)

吉野 さつき(愛知大学文学部人文社会学科現代文化コースメディア芸術専攻教授)

カバー写真: 京都芸術劇場 春秋座・舞台床 撮影: 田村尚子(ヴュッター公園)

大劇場「春秋座」の裸舞台の写真。カーブを描いているのは直径13m60cmの廻り舞台の溝です。2001年の開設以来、20年あまりにわたって使い込まれてきた床材には、さまざまな上演作品の記憶が刻み込まれています。(編集部)

編集後記

2022年度は、感染症等の影響はほぼおさまり、研究プロジェクトを無事に遂行することができた。研究分野においても、コロナ前の常識が変化し、また変化後の「新常态」が少しずつ定着しつつあることを実感する日々だったが、今後も、舞台芸術を取り巻く社会の動向に注視して、研究環境の整備に努めていきたい。

オープンラボラトリー OPEN LABORATORY

アニュアルレポート

vol.10 —2022年度—

2024年3月31日発行

企画: 京都芸術大学舞台芸術研究センター

舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点事務局

編集: 新里直之(京都芸術大学舞台芸術研究センター研究職員)

デザイン: ヴュッター公園デザイン室

学校法人瓜生山学園京都芸術大学

舞台芸術研究センター 舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点
〒606-8271

京都市左京区北白川瓜生山 2-116

TEL: 075-791-9144

Web: <https://k-pac.org/> (JP) <https://k-pac.org/english/> (EN)

* 本研究拠点は京都芸術大学舞台芸術研究センターが母体となり、
文部科学省「共同利用・共同研究拠点」の認定を受けて2013年度に設置された研究拠点です。

京都芸術大学

共同
利用

共同
研究

since 2013